

巻頭言

国際経営研究所所長 田中 則仁

「ボーダー」を考える

2022年度の国際経営フォーラムの特集テーマは「ボーダー」である。国際関係論を専門とする杉田弘也経営学部教授の提案で、今まさに時宜を得たキーワードである。

研究社の英和辞典（第5版）では、ボーダー（border）について「へり、縁、境、境界」などの訳語が紹介されている。これまでの国際関係の歴史、国際経済の経験は、ボーダーをめぐる争いの歴史であった。2022年2月24日のロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、まさに武力行使による国境の現状変更を意図した行為である。本稿執筆時点の5月において、事態は長期戦の様相を呈しており、解決への道のりは未だ遠く見えてこない。

また、2019年12月からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）では、ボーダーを超えた感染拡大が進行し、世界的な感染拡大、パンデミックになって2年余が経過した。国境を越えた人の移動が、ウイルスの感染を拡散させてきた。人の出入りを止める水際対策も、効果はあるものの、それによる経済社会活動の停滞、資源や原材料、中間財の移動停止が、人々の暮らしに与える影響は計り知れない。この2年余の間、本学では学生の学びを止めないとの方針のもと、2020年度は全ての授業が3密回避のために、オンラインで実施された。2021年度には、少人数の授業において対面の講義やゼミナールが実施されてきたが、教育効果の点では、PC画面のボーダー越しより、対面授業の方がはるかに優っていると筆者も学生も感じている。

筆者の専門分野である国際経営、国際経済の分野でも、ボーダーが長年の課題であった。古くは100余年前、欧州列強の各国が自国の国益のみを追求して自国の版図を世界に拡大して植民地支配をおこない、さらに国家間に壁を作り、ボーダーの中で自国の利益極大化を図ろうとした結果が第1次世界大戦につながった。終戦後にその反省から国際連盟が設立されたものの、各国は自国の国益を第一義に考え、広い視野からの長期的な全体利益を図ろうとはしなかった。主要各国の植民地を中心としたブロック経済が、新たなボーダーを築き、その内と外の交流を妨げることで、ブロック内部の利益をはかろうと画策した。当時から各国が得意な産業分野に特化し、相互に貿易を通じて通商を活性化することで貿易利益を拡大すれば、相互の経済的利益を増大できることは理論的にも示されていた。しかし、国際政治の国境をめぐる争いは、なかなか止むことがなかった。

第2次世界大戦から40余年を経て、1993年のEU（ヨーロッパ連合）の成立と、共通通貨ユーロの登場は、冷戦後の新たな社会の幕開けを期待させるに十分であった。この単一市場（シングルマーケット）と単一通貨ユーロにより、モノとカネの統一がなされ、域内の人とモノ、資金のボーダーを超えた移動が促進され、単一市場が形成され発展してきた。しかし、2016年6月のイギリスの国民投票では、EU離脱（ブリグジット）が決し、時代の針が逆戻りした印象を受けたのは、筆者だけではあるまい。

しかし、身近なところでも、ボーダーレス化は着実に進んでいる。コロナ禍の副産物で、現金の受け渡しが敬遠され、キャッシュレス決済が一気に進んだ。クレジットカード決済は以前から存在していたし、交通系ICカードもすでに定着していた。それがこの2年ほどで、コンビニエンスストア、スーパーマーケット、商店での支払い手段としても一般化してきた。コロナ禍がなければ10年以上かかっていた変化がこの2年ほどで進んでいる。これらのキャッシュレス決済は、それでも最終決済の段階では銀行預金があるの実物通貨を背景にして成立している。ところがこの10年ほどで急に存在感を増してきた仮想通貨は、その価値の保証をどこの誰が担うかが不明なまま、着実に人口に膾炙してきている。実物と仮想、リア

ルとバーチャルのボーダーが消えかかっていることも認識しておかなければならない。

改めて現実の世界に目を転じると、アメリカのトランプ前大統領は就任直後に、不法移民の阻止を掲げてメキシコとの国境に高い壁を作った。また、ロシアのウクライナ侵攻を受けて、各国はロシアへの経済制裁をすべく多岐にわたる分野での壁をつくって、ロシアの経済的な孤立化を図っている。しかし、ロシアからのエネルギー輸入停止や、国際決済手段スウィフト (swift) からの締め出しは、それを実行する諸国にとってもエネルギー源の減少や決済手段の停止によるロシアからの入金停止など、大きな代償を支払うことになる。何らかの政策を発動することは、相手国だけではなく自国にとっても大きな痛手を伴うことが改めて認識された。そして、一度発動した政策は、いつ、どのような条件が整ったら解除するのか、その出口のシナリオを描くことは、発動することよりもさらに難しいのである。

ボーダーを多角的にとらえ分析することで、これまで見えなかった世界の諸様相が明らかになるであろう。私たちも、今一度、ボーダーの意味するところを再認識する機会にしたい。